



花例百人一首玉締

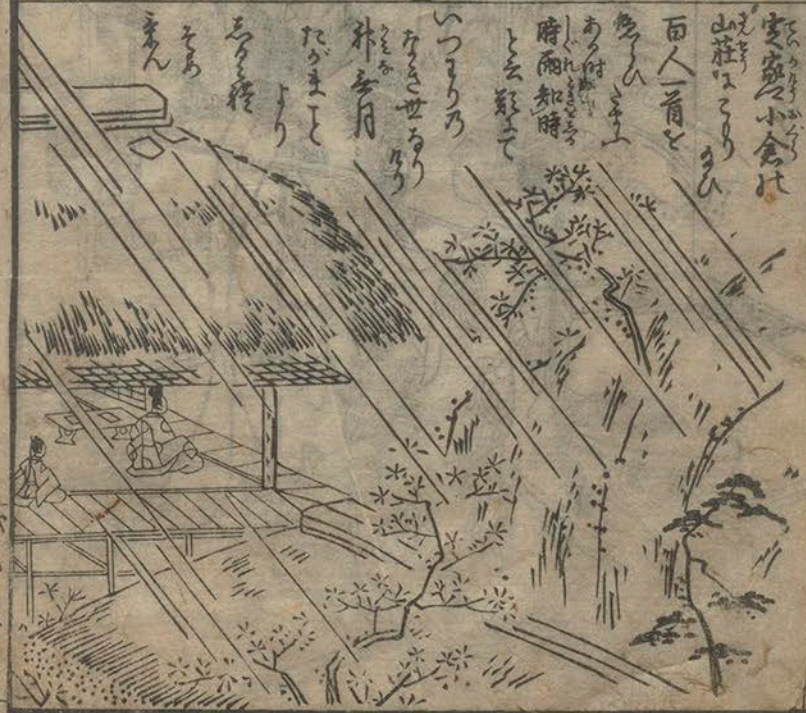


おきつて月夜
 け代き侍先
 都と都も
 そとへ
 智尊
 好入
 おせい
 松
 あとせ乃
 おきて世
 けとせぬ春の
 そとへ
 そとへ
 初子乃祝ひとも
 そとへ
 そとへ

祝言
相生



図



定家小倉
百人一首
時雨知時
と云

いつもの
なとせう
月

たうま
う

そあ
ま

ま

天智天皇

秋の田乃

わりのたの

管成あ

衣の病よぬま

持統天皇

春の夏

きふく

夜を

あま乃

かぐ



嫁の次

嫁人かん

ぶふぬあそ

見か

すでひろ

なま

んず

れひ

なり

わん

聖人の

川
村
か
う
れ



中納言家持
静のまをせ
るにそく
おのち
あつ
あつ
あつ



奥山み
麻の
とる
秋の
大
丈
夫



山色赤人
田子の浦
白ゆれふ
そる
大
丈
夫



柿本人麿
あ
ふ
ふ
ふ
大
丈
夫



うつとぬりゝあゝら
 けりけりをんをん
 かんくまはる事今
 世俗よんわいとふ
 せうしたのそとけ
 てまむてきまろ
 けとぎんとまも
 うみぬてなまばま
 ぐやくそくちうぬ肉
 は見合と。あふま
 ちうさちうり或ハま



あべの
 安清仲磨
 わのの
 うりさ
 けさる
 二重乃
 一ヶ月



森探法師
 わの
 うりさ
 ぞす
 世代
 人



小野小町
 花の色は
 うりさ
 けさる
 我身
 ながめ



蟬丸
 ちやこの
 けさる
 けさる
 ちやこの



新るどれ葉店に床
 上腰うちけまよとを
 かぐまゝあるひはき
 ねまんだれまゝあう
 ひごのに神お方
 けきよりてまぐ結納
 とおるなりきとて
 乃ちうゝといふぬ
 是は武法をさうおれ
 どもそ人ぐおぬ
 いふれどもとみとぬ

未だ儀堂
 和田のう
 い十時をて
 くらねと人な
 昔よあまのつり
 僧正遍昭
 天は風雲の
 かよんち
 し女れとて
 あげりそめ



湯成院
 けくを祿の
 こひより
 兄ま乃川
 つりて
 あちとぬ



河魚た大臣
 みちのくれ
 志のよめ
 誰ゆへり
 そめめ
 我るうかくに



あり又ばいざんを成
 けり指し平者といふ
 といひつゞき後儀
 あらざるいふ事
 式ハ七荷七種又
 又ふ種之荷種
 等此等七荷七種と
 之荷ハ種七荷七種
 種ハ者なり
 此ハ小社
 といふことなり

光孝天皇
 君が平の妻の
 世ふいふ
 まれつむ我
 衣ふよ君ハ
 中納言平



立つ種ハ平の
 山乃と種
 世なる
 きらば
 今頃りえ



たのめをいふ
 てう先乃術を
 正し
 人ハ内
 女
 正し
 正し
 正し
 正し

左東業平朝長
 子振神代
 五田川
 かしれ
 あり

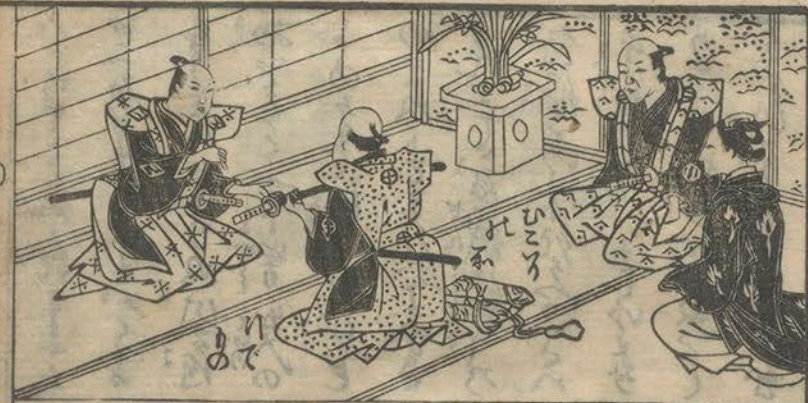


左東業平朝長
 子振神代
 五田川
 かしれ
 あり



多う先いさうのよ
 すもも何なりむと
 つれ義武おそく嫁
 心乃くちれぬり
 めんハ雲子ともな
 匠と碧るものなり
 そきよりたぐをそ
 せく何れも嫁いり
 すなりむうきよめ
 け新ものさばあり
 のよにおきりりる今

伊勢
 難波がさみト
 うたあいのうれ
 まねぐいよ我
 すぐてすや
 元良親王
 佐々木バ今
 そくあかト
 なふはまる
 歌をほくても
 あむとをむ人



素性法師
 今あむと
 いまどろりふ
 長月のふ羽乃
 月紙まらもつる
 文屋康秀
 吹くは秋の
 くらさ乃
 まるまば
 ひぐふりき紙
 あやうとらん



八つてふろし紙すまう
 せ一あのもまふよかふる
 身ふはたりぬけ酒
 抱とんとぶ下男お入の
 ものを酒とのむと
 のまぬこふひふつこ
 だんよてん残飯を乃
 包恨どつたろふさ
 千鳥ゆしそつと
 りてこれ松さぬて
 ういごめははる

大江千里
 月と徒ば
 のことおれ
 づ身はろの
 あさうはあふんど
 菅家
 いまびいぬさ
 うあふ
 みちのあふ
 作若まふく



三浦右大長
 名あれた
 あふさふの
 はねろふん
 ちれてはれ
 もふ



貞信公
 小倉山
 りみらふの
 今いふまじろ
 降幸まてなん



まきこころひつゝ
 ろう子うごやうとそ
 まくもくび私宅
 母なるとあり
 叔嫁入の敷もなま
 ハ舞どの方まへ
 りくゝ心愛れ
 ぢれくもとゆきま
 ありとあこころ
 らんといふ下なる
 けなハくぬきめ

中納言兼捕

兄乃う
 まれてま
 いほみ川
 とそ
 新



源宗子羽衣

山ざは冬
 けりさ
 人め茶も
 かきぬとねり人



九河内初恒

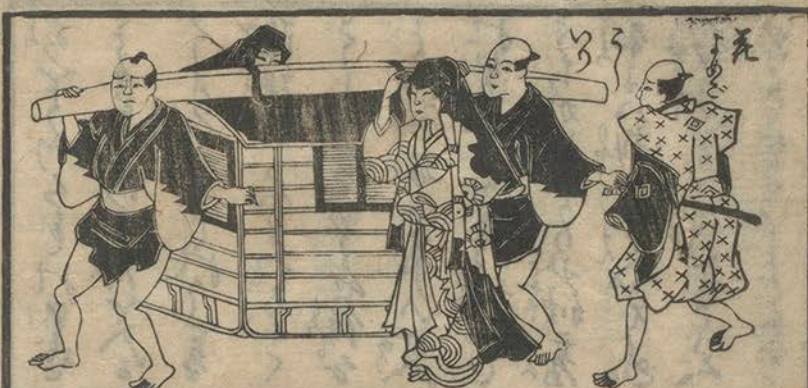
心あくみ
 おうや
 初雲の
 せる



壬生忠岑

有的のほ
 なくん
 あつ
 うまのれ





紀友則
 久々乃
 のどあささきの
 まくねれらん
 友京無風
 張をうもさる
 人うさむ
 高砂の松も
 ひう乃夜さうなふ




坂上是則
 物さけみ羽の
 月やまねて
 うねさふ
 あれあさる
 春道列樹
 山は風の
 うけさる
 まさきもあへぬ
 りみじかりなま




なるかたはなほとてふはる
 とやとてふはるはるはる
 とて嫁にれはるはる
 出立にれはるはる
 直にれはるはる
 とてはるはるはる
 薬にれはるはる
 とてはるはるはる
 とてはるはるはる
 とてはるはるはる
 とてはるはるはる

紀實之

清源養父

又ふ登の胡あ康さ

省近



りとていふにこそんけ
 うのいふこそんけ
 れうきよてこそんけ
 るひてあはさうまふ
 むごのいふこそんけ
 れうきよてこそんけ
 りとていふにこそんけ
 るひてあはさうまふ
 むごのいふこそんけ
 れうきよてこそんけ

中細玄教忠
 あいふこそんけ
 のらねんめ
 ううれい
 の代
 中細玄教忠
 あいふこそんけ
 のらねんめ
 ううれい
 の代



謙徳公
 人いふ
 身のうぐみ
 なりぬるにふ
 曾孫好忠
 ゆうれとて
 家人の
 子いふ
 ちのり



手ぬりしそて盡と
 すも直に小神を
 めしてあうとあうとあ
 ぬんどうとあんなあ
 れい合こんくのまを
 難有吹おねが振お
 盛年よりあうとあう
 上あうとあうとあう
 流振りりあうとあう
 ハ二汁あうとあうとあう
 王あうとあうとあうとあう

恵愛法師
 いま
 ちきまう
 じい
 子
 秋いあふり



源重之
 風をいふ
 岩うつ派の
 きれき乃
 ねりはうね



小舟もすまをてあ
 形りてあうとあう
 水あうとあうとあう
 長生なうぬぞようは
 へきねまはあうとあう
 聖とあうとあうとあう
 又あうとあうとあう
 中あうとあうとあう
 ちあうとあうとあう
 ころれとあうとあう
 ちあうとあうとあう

大中村社金明
 師恒ち博士の
 ちく火乃
 ねりはうね



若原義孝
 夫がそあけ
 命えさうも
 母いさあけ



くらやみの月あつてもなりぬ
 まげおこすまかあり
 とく子あけうり娘乃
 親里よりゆくしなり
 うよてみ日逗留すり
 舞れあひ朋友なり
 こころん席と違ふをま
 是都金まふと回す
 形りこそうらけふとて
 まうとりの様あま
 くら内より入るひあめ

赤深きつ
 屋すくなく祿を
 まうりのを
 はよけて
 うくすくの
 力成るくつか
 小或於内侍
 ちのといくち
 まの紙くれは
 まあもえと
 あまのうとて



伊勢大輔
 笑へのあれ
 都乃いま様
 あふくのめ
 あはいめらうか



清少納言
 夜とこめてあり
 そく着への
 けうともよふ
 笑ふあふさふ
 ゆうとど



乃ちまゝいひごなす
 るどいづも望ま何そ
 されんくごりなるりく
 ののちへ金銀つゝ
 ぞりけやうに後あぬ
 とてつりぞうこそく
 老乃始末ハかやう
 時れりなきハ身もよ
 無くともてくわの
 ともてあざけりまき
 んやうなりやうれも

方東丈道雅
 今ハキミ
 うえきんと
 人びくわうて
 ようくもく
 校中細玄定頼
 羽ぐあうら乃
 川旁き
 あうきまうた
 影のりどる本



何とされぬけはは
 とすすのたなる
 んまのハ子孫おの
 りひぬとまきま
 ぬれとまり
 かと主婦は中
 すれとややく
 と後あがたうな
 承よりんこれあ
 とさうぬけ
 ぬあぞうき

相模
 うみま
 不さぬ神さふ
 ありのを
 名を惜れ
 最大徳心
 りあ
 知と
 まふり
 志保人



月つきかき取りて五月ごご月つきは
 ともぬきハ岩い肌かわ帯おび
 けしきみとく生き緒おで
 ハ八や思おもふとくま乃なり
 花はなの袖そでより端はなは花はなの
 およけを俗ぞくまらう
 常とことくも月つき濃のて平へ
 産うむ時ときけ緒おを練ねて
 うぬきとすうりあう
 花はなとく五ご月つきよりハ
 うめこれ多おほかりぞう

周す坊ぼう内ない付け
 春はるの夜よ乃なりゆめ
 づりきり手たま枕まくら
 おいなくぞん
 名なこそおれ
 三さん條じょう院いん
 人ひともあうて
 うたよん
 なぐらへ
 ういーのうへき
 夜よすれ力つと四よ条じょう



結むす因いん法師ぼうし
 あ〜〜〜
 三さん室しつれふの
 りみち奈ない
 川かわ乃なりあきへたり
 良りょう選せん法師ぼうし
 けい〜〜〜
 家け成せい〜〜〜
 船ふね〜〜〜
 せれ〜
 秋あきの文ふみ書がら



才女にありては
 よしと成るべき
 候ふと大なる事なり
 なるこそ漏れぬ
 玉れやうる男児を
 かりりもは世に
 りてはや女子の
 八世門初め
 かりりともあむ
 月ハ中乃
 こそと花乃

大納言経伝
 門田のいまだ
 せづきく
 まるや小秋風
 祐子内親王
 善いゆき
 とぬ乃あ
 のあトや袖の
 めきも



中納言経伝
 源後頼朝長
 うのりき
 とを乃
 ちのい



多るなり百廿のめよハ
いふもあ
 喰砂れきどり飯
いふ
 やさりのうーく小石
いん
 云級と宝珠形は結
やまゝあり おひ
 そつきまりけうへり
まさかの むすしち
 おり焼かハ筋緯
とも
 とすめるなり女子ハ
いふ
 右男子ハたの孫のそ
いふ
 はきくらむものや
いふ
 三峯ハ髪並上月若
 乃その所りきくまんと



卷之十九

崇德院

陳を去る

やうせう

洛川の志

丁未小

源義昌

漢路行かよ

ち
ど
ろ
乃

よくまゝ

紅梅の笑より



待つてまうり霜月中の
 けしきもあつた
 五葉の月男子は
 思ひ女子は被褥なり
 あつても世俗今に
 口は年乃ナ月を
 あつてもいふと
 親類あつても
 思ひてあつても
 そまうりてん生後
 子孫なん思ひて

左京大寺
 秋風よふ
 いく雲の
 月れ
 待賢門院
 ながれ
 相を



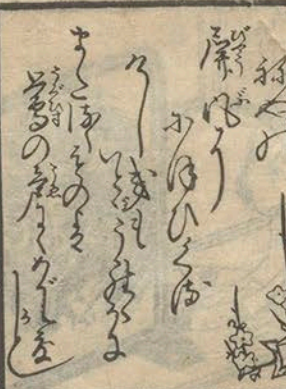
後徳大寺
 ながれ
 有の月



道周法師
 ながれ
 あみ



卷之四



わづな



わづな

わづな



かきのふえ

かきのふえ

かき

かき

かき

かき

かき

かき

かき

かき

かき



床蓮は昨

ゆゑあけぬ

橋の葉より

勢立

のぼり



室嘉門院判

新波江のあけ

かり杯を

一夜の身を

とや思ふべき



七夕乃又

七夕乃又

七夕乃又

七夕乃又

七夕乃又

七夕乃又

七夕乃又

七夕乃又

七夕乃又



孝子心親王

玉の結よ

さきまづ

よる

もてする

殷富に院大補

足勢をやれ

袖ふもぬま

ぬま

つらひのう



[illegible]

後束振振収前太政大臣
養々や
いもよ乃
いもいも
夜もいも
いもいも



二條院
我神ハ
人々
か

強うま倉くら者もの大たい居ぶ

世の仲の
子ふも
むも

流こゝあまのさぶら
 はるでうねりも



多儀雅經

みづの

この秋うき

東より来る

はきく衣なり





後鳥羽院

人をわいひて
うめい
あぢきられ
世成るふゆ
りのおりふ身



順徳院

百穀やうるま
新徳のあふ
まはあまうり
ひうかりきる



43956

作者 田中友水子
擅畫 北尾雪坑齋
筆者 中谷猪同
彫工 藤村善右衛門

大阪書林

文化十四丁丑年
正月吉日

舟町

天満屋源治郎

心齋橋通博労町南江又西側

天満屋安兵衛板

